

間断なくもれる声は、明らかなよがりになっていた。初めて受け入れた少年の牡棒で膣をかきまわされ、悦びにひたっている。お尻の筋肉が絶え間なく収縮し、それによって雅未も締めつけられる。

（ああ、気持ちいい、これ——）

バックスタイルという動物的な体位にも昂奮させられ、たちまち限界が迫ってきた。
「ちゆみさん、僕——」

間近なのを告げると、ちゆみが赤い顔で振り向いた。

「イッちゃうの？ 白いの出ちゃう!？」

「はい。あ、もう出そう……」

「ああん、どうしよ。今日、ちょっと危ないの」

ちゆみが困った声をあげる。自ら誘っておきながら、射精をどう受けとめるかまでは考えていなかったらしい。年下でも、鈴のほうがその点はずっと周到だった。

これはなかで出すのはあきらめるしかない、と、雅未が腰を引こうとしたとき、

「あ、そうだ。お尻——」

「え?」

「お尻に挿れて!」

アヌスを犯せというのだと、すぐにわかった。ちんまりとしたすばまりはたしかに魅力的だが、そんなところに入るのだろうか。

だが、襲来するオルガスムスの波が、瞬時に決意を固めさせた。

雅未は抜去したものの先端をすぐ上の肉孔にあてがい、力まかせに押し入れた。

「はううう」

臍に挿れたとき以上に苦しげな呻きがあがる。しかし、充分に濡れていたおかげか、それともちゆみの受け入れ態勢がよかったからか、頭部がくびれまでヌルツと入りこむと、あとはスムーズに少女の肛門を侵略した。

「あ、んああ」

雅未は感動の声をあげた。入り口の締めつけと、内部のふにと包みこむ感触が絶妙だ。腰が爆発しそうにわななく。抽送の必要すらなかった。

「あふッ、あ、はあ」

目の前がくらみ、呼吸が乱れる。足止めを食っていた精子たちが、先を争って突進した。

「イク——」

ビクン、ひくんツと、狭穴の締めつけに阻まれてもなお、強^{こわ}ばりは大きく脈打った。

その中心を、快感を伴った熱さが貫く。

「あ、あつ、出てるよお」

内腿がジーンと痺れる感覚。なおもドクドクと性汁を溢れさせる。

「あぁーん」

腸内にひろがる温かさを感じたか、ちゆみも悩ましげに臀部をくねらせた。

粘っこい体液にまみれたペニスを、ちゆみはパンティでいねいに拭^{ぬぐ}ってくれた。さすがに二度の射精を遂げたあとだと、いくら直に触れられようが、そうやすやすとふくらむことはない。

「……わたしのバージン、雅未くんにあげちゃったんだね。前も後ろも」

つぶやきに、ハッとして彼女の顔を見つめる。目が泣きそうに潤んでいるのに気づき、とんでもないことをしたのではないかという思いに駆られる。

「ごめんなさい」

謝ると、ちゆみは「ううん」と首を振った。

「わたし、すごく嬉しいんだよ」

そう言って抱きつき、チュッと親愛のキスをしてくれる。



「本当に、これでまた、バレエをがんばれそうだわ」

「応援しますから、僕」

「うん。お願いね」

今度は熱く抱擁^{ほうよう}してのくちづけ。互いの背中にまわした手で、肌をさする。

「あれ？」

いつの間にか復活を遂げていたペニスに気づき、ちゆみは嬉しそうにはほ笑んだ。

「元気だね、雅未くんの」

握って、緩やかにしごきたてる。

「だって、ちゆみさんが……」

「あー、ひとのせいにしちゃって」

でも、事実そうなんだからと、困った顔を向けると、

「それじゃ、わたしは雅未くんのオチン×ンを応援してあげる」

屈みこんで、そそり立つものをすっぱりと頬張った。

「ああ……」

まとわりつく舌の感触に、早くも腰が砕けそう。

雅未はのけ反って喘ぎをこぼした。